

最後の碁所名人・本因坊丈和（1787～1847）

天明七年沼津に生まれる。幼名は松之助。跡目のときは戸谷、それまでは葛野（かどの）を名乗る。幼くして碁才を認められ十世烈元の弟子となり、その後十一世元丈の門下となる。十六歳のとき初段。丈和の出生地については、江戸、武州、信州など諸説あったが、「丈和出自考」の大澤永弘氏の考証による、豆州（現在の沼津）木負村の五十集商（いさば・魚の仲買人）の次男という説に従う。丈和の十代、特に後半は謎にまつまれている部分があり棋譜もあまり残っていない。それでも修業のためか、諸国を巡っていた史実は残っている。文化四年（1807）六月、二十一歳の丈和は山形鶴岡の藩士長坂猪之助を訪ね、一年間留って二十一局戦った。丈和（松之助）定先から始め、途中で勝ち越し先相先とした。文化五年暮れに烈元が死去し、急遽江戸に戻る。翌年春、元丈が当主となる。跡目には丈和より一歳年長で、一つ上の五段の奥貫智策が望まれていたが、早世してしまう。あとは丈和しかいないのだが、跡目に立てられたのは七年後だった。その間、丈和はよく研鑽し急速に腕を上げていった。文政二年六月、三十三歳六段の丈和は晴れて跡目となった。十一月の御城碁は安井算知に定先五目勝ち、そして名人碁所に就いた。丈和の御城碁の対局数は十年間で九局（七勝二敗）、意外と少ない。伝えられる丈和の風貌は、「短軀肥大眉太く頬豊かにして従容迫られ爛々たる眼光は犯すべからざる風あり」とある。

十二世本因坊丈和は江戸末期から明治中葉にかけて「碁聖」と呼ばれた。四世本因坊道策が「前聖」丈和が「後聖」である。江戸時代最後の名人碁所であり、それまでの碁技を集大成して新たな道を後進に示している。碁聖の名称が明治時代に秀策に移ったのは、秀策の近代性が喧伝されたことや、丈和と幻庵因碩の名人碁所争いが座隠談叢によって暗闘と位置付けられ、丈和のイメージが著しく傷つけられたためと考えられる。

談叢に後進の為の訓戒としてのべられている一節：——— それ蛮棋に三法あり。石立、分かれ、堅めなり。——— およそ三十手、或いは五十手、百手にして勝負を知るを第一とす。中盤戦を「分かれ」と表現するのは、戦いをフリカワリと結び付けているのは丈和らしく、また戦いによる形成判断の重要性を強調していることで、力のありかたが示されている。地取り、石とり、敵地深入りし、石を逃げる、みな悪し。それ地取りは隙なり、石取りはむりなり、深入りは欲心なり。石を逃げるは臆病なり。故に地と石とを取らず、深入りせば、石を捨て打つべし。地を取らざるは堅固、石を取らざるは素直、深入りせざるは無欲なり。とかくわが石を備え堅むるを第一とし、次に敵の隙間に打つべし———

功成り名遂げてからの訓戒ですから割引して聞かなければならないが、發揮するだけでなく耐えるのも力であることが示されており、改めて丈和の碁を見れば思いあたることも少なくない。丈和はすべて囲碁に賭けていた。自信過剰になった時期もあったようですが、芸への厳しい目と確かな目は生涯変わらず、しかも自分の目だけを信ずる姿勢は多くの反発を買っても動じなかった。従容迫られども、爛爛たる眼光はおかすべからざるなり、と表現された風貌は、囲碁以外に心を向ける時間がなかった丈和は盤上が唯一の表現手段と終生全うした人である。

完